

土肥裕氏を悼む

小林一章

旧くからの友、土肥裕氏が1996年6月に膵臓癌で亡くなりました。享年57才のはずである。土肥さんと私はそれぞれの師が寺阪門下の兄弟弟子であった本間、野口両先生の初期の門下生という事で今から30年も昔修士2年の頃奇しくも私の現在の勤め先である東京女子大学で寺阪先生主催のセミナーで顔を合せたのが最初であった(と記憶している)。そこで彼はMilnorの「同相ではあるがPL同相ではない複体」の例が書かれている論文を紹介したのであるが、論文全体を紹介したというより、その論文に書かれているレンズ空間について解説したというのが正確であろう。私が属していた野口ゼミではどんな論文でも1回(特に長いものでも2回)のゼミでどういうことが書かれているか、その筋道に重点を置いて話をすることが求められていたので土肥さんの筋道を度外視した、論文の極く一部にすぎないレンズ空間についての詳しい解説には新鮮で驚きもし又少々退屈を覚えたことも記憶している。しかし兎に角論文の中でどう書かれていようと自分にはレンズ空間をこう理解するのが一番納得いくんだという意志が鮮明に見えたし、土肥さんのその後の数学に対する姿勢もそうであったように思う。どのように時代が変わり、土肥さんのやっていることが時代からずれていても自分が納得するという事を最優先にしていたあの姿勢が。図抜けて長身な土肥さんがいつも申し訳なさそうに背をかかめ、ほそほそと喋るあの姿が目には焼き付いて離れない。同学年であった気安さから学会やシンポジウムの折りに会っては今どんな事を研究しているかを相手の理解度等頓着なく熱っぽく、ほそほそと話合ったものである。其の内お互い年齢が増し、雑事が多くなり、特に土肥さんは真面目な性格が災いして勤務先で重要な役職に着き、こき使われて学会、シンポジウムにあまり顔を見せなくなった。それでも時折顔を会わせると相変わらず数学の話しをしたり、多くなった雑事の話をしては大変だなあと無責任な相槌を打ったものである。たしか一昨年の箱根セミナーに久しぶりに土肥さんが顔を見せ、僕もようやく役職から解放され少しは数学に専念出来そうだと言って嬉しそうにしていたのが彼と会った最後になってしまった。数学が好きで研究者になった者が志と異なる事ばかりをやらざるを得ない立場のつらさは解っていたので、その時は心から祝福を送り、また若い頃のようにかみ合わなくても楽しい議論が出来ると思っていた矢先であった。勤務先やご家族の前では違った能力を見せていたかも知れないが少なくとも私の知っている限りの、あの柔和な笑顔とほそほそと話していた土肥さんに心からの哀惜の念を送りたい。

1996年12月